

上田秋成の氣質物

『諸道聽耳世間猿』小考

高永爛*

目次

- 一. はじめに
- 二. 其磧の氣質物と『諸道聽耳世間猿』
- 三. 氣質の急変と結末
- 四. おわりに

一. はじめに

周知の通り上田秋成(以下、秋成)は『雨月物語』(1768年成稿、1776年刊行)をはじめとする讀本の作家として評価が高い。讀本は仏教的因果応報や道徳的教訓などを主題とするものであり、このジャンルは江戸後期へと継続される。しかし、秋成の最初の小説『諸道聽耳世間猿』¹⁾(以下、『世間猿』)は意外と彼の名を世に廣めたジャンル讀本ではなく浮世草子である。そして、浮世草子の中でも表向き娯樂性とも呼び得る「笑い」を主題とするジャンルの氣質物²⁾に屬する³⁾。氣質物は京都の書肆八文字屋の代表作者江嶋其磧(以下、其磧)に始まり、以降の後續作者に受け継がれていったが、其磧の作品以上に人氣を得たものはほとんど目につかない。この其磧の氣質物の基本形式は、佐伯孝弘氏によると次のように整理できる。①氣質題、②一定の身分の者にまつわる話を集成、③短編形式、④對照と誇張の方法を多用、⑤上・中流の商人が主人公、⑥三都の当代を舞台とする都會小説とまとめらる⁴⁾。『世間猿』は序文に「さ

* 고려대학교 시간강사, 근세문학

- 1) 5巻5冊 浮世草子、『日本古典文學大辭典』(岩波書店、1986)には「明和元年(1764)成立(?)」とあるが、秋成研究書の多くには、明和三年(1766年)刊とする。『諸道聽耳世間猿』はその題の示す通り、「世間のいろいろな物事に耳を立て聽いたものを可笑しく示す。」と受け止められる。
- 2) 息子、娘、親父、妾等の身分上の類型を對照や誇張により面白おかしく描いた浮世草子の一ジャンル。
- 3) 長島弘明『秋成研究』(東京大學出版會、2000)146頁、『時代別日本文學史辭典近世編』(東京堂、1997)76頁にも『世間猿』は「氣質物」と記されている。
- 4) 佐伯孝弘『江嶋其磧と氣質物(近世文學研究叢書17)』(若草書房、2004)282-286頁参照。

らば尻わらひの戯れ草を、朝三暮四の筆にまとめて書集めて、題号を聴耳世間猿とよぶ事ハ、見猿の人の伽ともならんかし。5)」と明記されている通り、その題は世間の種々の巷話をそっと聞き集め面白おかしく描くことそのものを示し、上の①には該当しないことは確かである。しかし、主として商人が登場し②、⑤には該当すると言えよう。また、③、④、⑥の条件をも整え、『世間猿』は其磧の氣質物と形式上では大差ないと言える。したがって、『世間猿』を氣質物としてジャンル分けすることは無理ないことであろう。

『世間猿』の内容に関しては森山重雄氏⁶⁾の包括的研究をはじめ、モデル研究⁷⁾、仏教との関係⁸⁾、伝承や知識との関係⁹⁾、挿繪研究¹⁰⁾などが行われ来た。これらの研究は主に話の素材である典據と深く関わるものである。しかし、意外にも『世間猿』の「主題」に関する具体的な研究はいまだ果たされていない。ここで主題とは作家の意思如何に関わらず、作品全体を通して具現される主要な思想内容であると定義する。つまり、ここで用いる主題の意味は「何を描いたのか。」に通ずる。

一方、長島弘明氏は以下のように指摘されている。

『世間狙(ママ)』『妾形氣』の二作は、滑稽風俗小説とも称すべき浮世草子の氣質物であり、一方『雨月物語』は、中國小説を主として下敷にし、修辭を和漢のおびただしい古典に據った、思想的翻案・歴史小説(前期讀本)であり、文体から人間描寫の方法まで、その違いは歴然としてゐる。(中略)ジャンルの相違を越え、秋成の浮世草子兩作と『雨月物語』がかなり近似した人間認識を示していることは、すでに様々な形で言及があり、(中略)秋成にとって、ジャンルの相違は明確に意識されていたことは違いないが、創作意識それ自体について言えば、『世間狙』『妾形氣』と『雨月物語』が結果的には地續きの所にある。11)

では、長島氏の指摘される『世間猿』が有し、かつ『雨月物語』にまで地續きのものとされる創作意識、つまり主題とは何であろうか。この素朴な疑問から本研究は出發する。そして、『世間猿』の主題を突き止める事こそが本研究の目的である。

其磧が氣質物を執筆してから秋成の氣質物『世間猿』が世に出るまで約四十年ほどかかった。12) この時間的隔たりは決して短いとは言えず、同じジャンルである氣質物であっても其磧

5) 森山重雄『上田秋成初期浮世草子評釋・諸道聴耳世間狙』(國書刊行會、1997)27頁。

6) 上同書『上田秋成初期浮世草子評釋・諸道聴耳世間狙』

7) 井上敏幸『諸道聴耳世間狙』冒頭話のモデル』『上田秋成全集(月報)』(中央公論社、1991.8)

8) 森田喜郎『諸道聴耳世間狙』における仏教批判について』『文學研究』(日本文學研究會、1973.7)

9) 向高亞由美『諸道聴耳世間狙』に見られる秋成の中國古典の引用態度』『京都教育大學國文學會誌』(京都教育大學國文學會、1997.12)、堤邦彦『諸道聴耳世間狙』の構造―世間と伝承』『國語と國文學』(東京大學國語國文學會、1980.3)

10) 神樂岡幼子『諸道聴耳世間狙』の挿繪』『國文學(關西大學)』(關西大學國文學會、1993.12)

11) 注3)の前掲書『秋成研究』146頁-149頁。

12) 『世間子息氣質』は1715年、『世間娘氣質』は1717年に刊行される。

の作品から見受けられる「主題」と『世間猿』のそれとは何かしら変化を成し遂げた可能性が高いと予想できる。したがって、『世間猿』を「主題」をもって裁断し、これに先行する氣質物の主題と比較することにより、其磧から秋成への氣質物における「主題」の変化行跡を辿ることにする。これは『世間猿』の諸研究の結果に、小説の「主題」という新しい問題意識を投げ掛ける事にもなるだろう。そして、氣質物の系譜をもう一度見直す契機を得、また、江戸小説史において氣質物が果たした役割を「主題」という面から再考察する事をも可能になると思われる。

一方、「主題」を具現化する小説の背景、文体、人物等の諸要素の中で、『世間猿』は其磧の氣質物のように厳密な意味で類型人物を用いてはいない。前述したように上・中流の商人がよく主人公として登場はするが、例外も多々ある。¹³⁾したがって、其磧の質物と『世間猿』の「主題」の差異はこの人物による可能性が高い。ここで、人物登場の必然性は筆者が描こうとした「主題」と多かれ少なかれ関連性があることは言うまでもないだろう。したがって、『世間猿』の「主題」を突き詰めるために、人物の氣質を分析し、その人物登場の必然性を考察することにする。また、先行する氣質物である其磧の作品との比較により、氣質物の「主題」の変化行跡を辿ることにする。このように『世間猿』の「主題」は、其磧の氣質物で見受けられる典型的人物の登場の必然性との比較により、より鮮明に浮かび上がるだろう。

二. 其磧の氣質物と『諸道聽耳世間猿』

前にも述べたように『世間猿』は氣質物である。そして、其磧の氣質物と形式の上ではほとんど大差ないことも前で確認できた。では、本稿の目的である「主題」を探し出すためには、その内容を確認する必要がある。ここで、『世間猿』の形式ではなく、その内容こそが「主題」とより緊密であることには異論ないだろう。

一方、其磧の氣質物で見受けられた氣質の誇張と対照は、主に世間知らずのどら息子やどら娘の他愛ない氣質の描寫による「笑い」や「教訓」の爲¹⁴⁾だと言える。この点、以下『世間息子氣質』の卷三の一の獨り息子助太郎の風流氣質の例を引用文から確認してみよう。

助太郎といへる子を持ける。ひとりも獨りからと利發^{りはつ}にしなりて、親の氣を助け、諸人の讚^{ほめ}ら

13) 主人公が上・中流の商人でない場合は、二卷一回の相撲をする息子浦之介、三卷三回辰巳屋宇治江という五十過ぎの舞子、四卷三回の美人唐土大夫である。

14) 高永欄「『혼초 니주후코(本朝二十不孝)』와 『세켄 무스코 가타기(世間子息氣質)』의 비교 고찰」『日本學報』第64集(韓國日本學會、2005. 8)、「『세켄 무스메 가타기(世間娘氣質)』의 성립 과정 모티브에 대한 고찰을 통하여-」『日本學報』第66集(韓國日本學會、2006. 2)の中、『世間子息氣質』、『世間娘氣質』の内容の分析により、其磧の氣質物の主題は「笑い」であり、かつ「教訓」であると見受けられた。ただし、『世間娘氣質』の方がより「笑い」に重きを置いていると言える。

もの
れ者、親の身にしては一しほうれしかりき。(中略) 助太郎眞實しんじつ かんしんに聞て感心し、「そなたを京への
ぼせし程とくの徳とくあって、至極しごくの御指南しなんを請て、自今じこんの歌のよみやうを得道とくだういたした」と、是より商
賣は大きな歌の妨さまたけと觀念し、(中略) 親一門異見すれ共さらに用ひず。あまつさへ心も形も公
家きかにならではと、月代のばして儒者じゆしややら按摩取あんまとりやらしれぬやうに、15)

利發だった獨り息子助太郎はある拍子に歌の世界にはまり、商賣をそっちのけにしている。
そして、助太郎の描寫は歌を公家に評価してもらいたい一存でだまされる所に重きが置かれて
いる。つまり、ちんぷんかんぷん話を眞に受ける助太郎の世間知らずな姿が「笑い」を誘うので
ある。助太郎は零落するが、これが涙を誘ったり「教訓」をもたらすわけでもなく、單に歌に純
粹にはまり容易く騙される姿が面白おかしく描かれているのである。

一方、『世間猿』の四卷一回でも、助太郎のように商人という生業に不似合の風流を好む伊
兵たる人物が登場する。登場する家業に實直な兄とは正反對の論好きの、所謂、風流氣質の
弟伊兵衛の描寫は以下のようである。

兄伊左衛門は幼少より世渡りの心がけよく、商賣がらとて握り墨の卑吝人(しわんぼう)。(中
略)弟の伊兵衛は兄の氣質とはそこばくのちがひにて、生得うまれつきの廉直すなおより迂作うそつかず、追従ついぞうきらひ
にて、身持万事に高情をこのミ、兄の吝嗇ゑに憎みて、常中とよからず。春は飛火野とぶひのに若菜なを摘
くらし、夏は佐保川さほの螢ほたるが、洞ほらの楓樹もみぢに小鹿をしかの鳴音なくねをそえて秋を感じ、さむき夜のあられ酒に
冬籠りして世事にかかはらず。(中略) 此男のくせにて、何事を稽古ゑしても最初から論がつき過ぎ
て、無用の事に念を入れて、金銀を積んでも、伝授といふ程の事さらへてしまはねバ、古今の三
鳥三木ゑ、源氏物語に三箇の伝、勢語に七箇の大事と残りなく伝へ得て、宗祇法師の髭ひげに香をと
められたハ、連歌を案じる便りになる事にや。もし左様ならば私が髭ものばしてたきしめましま
うかとの執心ゑに、花のもとも返答さしつまり、16)

ここで、生業に似合わず風流を好む風流氣質の弟の誇張された描寫は、「笑い」のためとは言
難い面がある。一見、家業を大切に、實直に商賣に精を出し、吝嗇でありながらも弟を経済
的に助ける兄の方が善玉と見受けられる可能性もある。その反面、弟の方は家業に勵むどころ
か家業に精をだす兄を卑下し、最後まで自分の風流に對する氣質を貫き、結局氣違いになり行
方不明になるが、それは自分の意志とは關係なく持たされた生業、つまりある種の宿命に順応
できず、實直に風流を楽しみ、その中で生きたいというだけの本能に近いものであって、これ
が實在する当時の倫理意識とはすれ違う部分があるにせよ、彼を惡玉とは言難い。以下、この
点再度垣間見ることのできる部分である。

15) 現代教養文庫『世間息子氣質』(社會思想社、1990) 卷三の一、290-292頁。

16) 注5)の前掲書『諸道聽耳世間猿』四卷一回、121頁-122頁。傍線筆者(以下同様)。

一日も(妻を)はやう呼むかへて、初孫を抱してたも。第一母への孝行と詞をつくしていはるれど、伊兵衛中中聞入ず。母には風流を遊ばぬゆへ御合点がまいらぬ。妻子に足をつながれてハ、諸道共に成就いたしがたし。いにしへの名ある人は、皆家を捨て剃髪し、歌枕修行せられました。(中略)人は一代名は末代、虎は死して皮をとどむと、禽獸すら心なきにあらず。(中略)世人皆濁る、我ひとり清りと、水鼻たれて小うさんにさまよふを、(中略)それ地獄遠きにあらず、極樂はるか也、いそげいそげと、あやぬけのせぬ御告に、いとどまよひのたねぞと成ける。17)

上の引用文から、弟伊兵衛の描寫の場合悪玉とは言難い。なぜなら、上の引用文と合わせて冒頭に伊兵衛たる人物は「弟の伊兵衛は兄の氣質とはそこばくのちがひにて、生得の廉直より迂作つかず、追従きらひにて、身持万事に高情をこのミ、兄の吝嗇に憎ミて、常常中よからず。」とかえって一種の正義感、倫理意識の強い青年とも見受けられるからである。ただ、弟伊兵衛は生業を初めとする既存の価値観、つまり宿命に順応出来ず、結局氣違ひになり破滅へと向かった。つまり、伊兵衛の氣質の設定は生業に順応できない一個人の姿をそのまま寫し出しているのであり、必ずしも先行氣質物のように氣質の設定が「笑い」や「教訓」の爲ではないのである。

次に、『世間猿』一巻一回の場合を見てみる。登場人物小西行長の子孫、小西三十郎は現在は薬種問屋を営みながらも、行長の血を引いてか武勇を好む。生業とは程遠い三十郎の誇張された武芸氣質の描寫が「笑い」を醸し出している。また、武士として生まれながらも商人氣質の勘六との対照によって、より鮮明に三十郎の武士氣質が浮かび上がって来ると言える。

あるじの三十郎はいまだ若年ながら、先祖の武勇をしたひ、軍學をこのミて不斷一刀を佩はさみ居間には城取の砂物をつくりて、兵書あまた机に充滿、あけ暮孫吳が奇計を感じかねてハ大祿も戴く望ミ。万事の物好猛猛しく、一里出るにも鷹匠足袋に武者草鞋、肌の守袋には一寸八歩の念じ佛。(中略)此勘六ハ武士の腹に生れながら生得劍術を嫌ひ、不鍛練ゆへ、浪人のよすがに手習ひ十露盤の指南して、どふぞ壹貫目くひためたらば、商人とも出かけるつもりなれば、18)

ここで見る商人の武芸好みは『世間子息氣質』巻一の二などにも描かれている点、既に指摘されている¹⁹⁾ように、三十郎の武芸氣質が先行氣質物のように新鮮な「笑い」をもたらすためとは言い難い。そして、この三十郎が武芸氣質になった原因は傍線部で確認できるように、先祖小西行長のためと明記されている。したがって、読者は三十郎の武芸氣質を殊に疑問も持つわ

17) 上同書『諸道聽耳世間猿』、124-127頁。

18) 上同書『諸道聽耳世間猿』、33-34頁。

19) 上同書『諸道聽耳世間猿』、41頁。

けでもなく、ある種の宿命的なものまで受け入れることができ、このため三十郎の武芸氣質の設定から「笑い」を期待することは難しいだろう。しかし、本来の商人としての生業に似合わず武芸を好む律儀な三十郎は結局は破産し、勘六にお金を借りた結果騙され、復讐するため勘六を待てど待てど来ないという不思議な運命の持ち主である。三十郎もまた、前伊兵衛と同様、生業というある種の宿命に逆らったものが復讐のためにさ迷うという数奇な結末を向かえる。つまり、武芸氣質の設定は生業を捨て、宿命に逆らった者の数奇な結末を見せるためである。そして、三十郎もまた伊兵衛同様、元來悪質な氣質ではない事は以下の引用文より確認できる。

勘六聞届け、玄關へ出て對面すれば、かはり果たる三十郎が姿。何もいひ出さぬさきに、一より十まで涙を流し、御異見を用ひませず、かくの仕合と誤つて改たる口上に、(中略)三十郎ハ一生の口惜涙。無念や表裏侍めにたばかられた。20)

『世間息子氣質』の助太郎の場合、伊兵衛ほど歌に関する大きな志や人生観があるわけではなく、それこそある拍子に讀んだ歌が褒められ、それを持続的に褒められたく、歌の道に没頭していくと見ても差し支えないだろう。つまり、褒められたい獨り息子の習性がたまたま歌と関係したなのである。そして、この点「笑い」を醸し出していると言えよう。

この反面、『世間猿』の三十郎や伊兵衛は生業に似合わぬ氣質のため、これが一生彼を苦しめるジレンマになり、結局は破滅する。しかし、生業に不順応な三十郎や伊兵衛の氣質は決して悪質なものではなく、むしろ引用文から兩人物とも純粹な人間として描かれている。したがって、兩人物の氣質は「教訓」の設定とは言難い。むしろ、兩人物からは現實を反映するルポタージュ的視線が感じられる。21) つまり、『世間猿』での一人物の氣質はあるがまま描き出され、これはルポタージュ的視線、所謂「現實告發」の役割を持つと言える。これこそが、氣質物『世間猿』の新しさである。

言い換えると、先行する氣質物の氣質描寫が「笑い」と「教訓」のためであったとすれば、『世間猿』の氣質描寫は「現實告發」のためであり、これによりあるがままの人間像が浮かび上がるのである。そして、これは生業という宿命の前では至極はかない人間像を描くためであると言っても過言ではないだろう。もう一つ、生業という宿命に逆らった氣質者を『世間猿』の三卷二回から見てみよう。

取所なき不孝ものゆへ、家出のなりに訪ねもせず。子のない昔とあきらめて、一代切の了簡なれば、幸に療治もはやらず。されど仕にせの打身藥、一服二十四文づつ、札の迂の雲助が、日

20) 上同書『諸道聽耳世間猿』、一卷一回、38-39頁。

21) 注3)の前掲書『秋成研究』のⅡ「秋成浮世草子のゴシップ性」75-90頁の中で、長島氏は『世間猿』の一部に見受けられる巷談的性格を指摘されている。

の岡峠^{とうげ}でふみくぢつたが、あの薬^{くすり}でよかつたといひ触^ふせば、矢橋^{やばせ}の船頭^{せんとう}が、舟^{ふね}が^ついで突腕^{ついで}した痛^{いた}が一^{いっ}ふくで良^よつたと悦^{よろこ}ぶと^り沙汰^{さた}。誰^{たれ}いふとなくよ賣^うれど、老人^{らうじん}夫婦^{ふうふ}が手^てずさびなれば、買切^{かひき}す事^{こと}の^みにて、いつ鍋釜^{なべかま}の賑^{にぎ}ふ事^{こと}なく、目^めの見^みへる蟬丸^{せみまる}夫婦^{ふうふ}、しるもしらぬも哀^{あは}れや見^みん暮^くらし成^なけり。22)

夫婦は貧しいながらも、實直に薬賣をしていたが、息子は不孝者ゆへ家出をする。この息子は問題を繰り返し起すが、輕業の口上に雇われたりと、口達者な素質はあるものの放浪するという、實直な親とは対照的である。しかし、彼は結局親の生業を譲り受け繁盛する。つまり、息子は一旦生業という宿命には逆らったものの、後、宿命に従い、良い結果を招いたのである。一見、これは「教訓」にも取れるが、彼が親の生業を譲り受けるまでの段取りが以下の引用文で確認できるように、非合理的、または非現實的過程を経るので、一概に「教訓」とは言えないものである。23)

いやしからぬ仁^{じん}体^{たい}なるが、三平^{さんぺい}が顔^{かほ}をつくづく見て、貴様^{きさま}ほどでござると尋^{たず}ねれば、私は京都^{きょうと}の者^{もの}、急用^{きゅうよう}にて大坂^{おおさか}へ下^{くだ}りますといへば、されば先程^{せんじょう}から其元^{そのもと}の人相^{にんさう}を見て居^ゐまするに、天晴^{あっぱれ}秀才^{しゅうさい}、出世^{しゅつせ}する人^{ひと}なれど、(中略)怪異^{くわいゐ}になやむ所^{ところ}の相^{さう}がそれでしれました。貴様^{きさま}の相^{さう}も學道^{がくどう}がひらひてあれば、そろそろ医^いでもめさるるか。薬店^{やくてん}などもようござらふと、24)

上の傍線部で明示されているように、息子は「怪異になやむ所の相」の放浪する宿命だったが、「貴様の相も學道がひらひてあれば、そろそろ医でもめさるるか。薬店などもようござらふと、」によりやっと息子の宿命が良い方向へと向かっていることが分かる。つまり、生業に戻る契機は息子の努力如何ではなく「宿命」であると示しているのである。したがって、元來の生業に戻った息子氣質の設定もやはり「教訓」のためとは言難い。

三. 氣質の急変と結末

『世間猿』には一卷三回、二卷三回、三卷三回を除いた全ての話にある種、前後説明のつかない話がある。これは全話の内、三分の二以上に当たる分量であり、決して少ないとは言えない。まず、一卷二回の場合を見てみよう。

22) 上同書『諸道聽耳世間猿』、101-102頁。

23) 上同書『諸道聽耳世間猿』、107頁の評釋にこの話はモデルがあること明らかにしている。

24) 上同書『諸道聽耳世間猿』、104-105頁。

女房ハおふゆとて、四十に三ツ四ツ老たれど、爪はづれ賤しからず、夫の神心をうけつぎて湯津の爪櫛におくれを清め、いつも八重垣を出ずにしほたらと、二人が中の稲田姫、今年十五の桂の眉、名はおしでとつけて、世の浮きふしの忘れ草。手足ハきやしやに育ても身にハ汚れし古裕。(中略) 此隣に蠅聲なす邪神、奉公人の口入の生馬の十兵衛とて、是も此春女房にわかれ、(中略) 表向きの女房、娘とも親子の盃。25)

上の通り、おふゆと十兵衛は再婚をする。おふゆの再婚相手十兵衛が急に心を入れ替え、逆におふゆは貪欲になるが、このような人物の氣質の急変は亡き夫古太夫の亡靈の仕業だとの噂さで説明される。

目前古太夫が恨ミのなすわざと、人皆噂は仕たりしが、男を追出す厄神女房は、いつの世にむくふかしらぬ。^{*}26)

おふゆのように、人物の氣質が不可解な急変をもたらす場合はこれ以外にも六つある。まず、二巻一回の浦之介の貧しさは「貧乏神」のおかげであったと知り、浦之介は病気になる話、三巻一回のしとやかな女性であった尼が女傑へと急変するがこれは「武芸氣質」のためだったという話、四巻二回の瓜生の大げさな芝居好きに比して肝っ玉が小さいが、芝居好きから大胆になり江戸に下る途中で田舎者だという事が徐々にばれたところを本文中では「臆病の神下ろし」のためだとするはなしである。そして、五巻一回の狐採りの話、五巻二回の貧しい医者宮内は不思議と虚空に上がりそのまま行く先知れずになり、一ヶ月後宮内は戻ってきては、着々と占いで当てる話がある。前章でも確認した三巻二回の話は薬屋の息子三平が放浪氣質であったが人相を見てもらったことを契機に薬屋になったというものであった。この最後の三巻二回の薬屋の三平の話以外はすべて否定的な結末を向かえるという点にも注目したい。

以上のように人物の氣質が不可解な急変をもたらす場合、「貧乏神」「武芸氣質」「臆病の神下ろし」など、目に見えない不思議な力、つまり「宿命」とも呼び得る「怪異談²⁷⁾」により前後の説明がなされるのである。

もう一つ、氣質の結末が不可解なもの、つまり「怪異談」へと向う場合である。四巻三回での話を例に取ってみる。

よし助も出入をとめられ、宵宵ごとの逢坂も、關守に見付けられじと、しのぶ程、なを思ひハます鏡。見付た所が深い縁、どうふで是なら添れぬ中、いづくの浦へも立退て、一日なりとも夫婦ぞと、(中略)仙家の丹薬に不老不死の歡樂を究むべしと、妻がおほへし薬ごしらへ、ちかき桃

25) 上同書『諸道聴耳世間猿』、45-46頁。

26) 上同書『諸道聴耳世間猿』、50頁。

27) ここで「怪異談」とは神出鬼没的不自然な話の進展や事件に限定する。

山の流れこそ、武陵の人のまよひ道、桃源のしたたりぞと、丹竈をひらいて服するに、聾ほども
きかばこそ、夫は風のこちとて、ぶらぶらとわづらひつけば、(中略)但し丹藥が利いて仙人
になりもしたが、八月十五日の夜、月のあきらかなるに家出してふたたびかえらず。28)

ここで吉介はやっともの思いで唐土太夫と夫婦になる。唐土太夫が造った不老不死の歡樂
を得るはずの藥を飲み込んだ吉介は不思議と氣違ひになってしまい、八月十五日の夜家出をし
たつきり戻ってこない。この不可解な結末は話は「丹藥が利いて仙人になりもしたが、」という
「怪異談」により説明される。

これ以外にも、不可解な結末へと向かう話は四つある。一卷一回の三十郎が復讐のために勘
六を待ち伏せしようとしているが、いつかは来るはずの勘六が待てど待てど来ない話、二巻二
回の清太郎の死後、不思議にも姪、初孫、飼猫が次々と死に終に惣領太郎七も死ぬ話、四
巻一回の商賣には精を出さず高尚な論ばかり繰り広げていた弟の伊兵衛は不思議に癩癩強
くなり終に狂ってしまう話、五巻三回の嵯峨野の異様な人々の集まりをみて懲りた富太郎が京に
戻り繁盛する話がある。ここでも、最後の五巻三回の話を除いてはすべて否定的な結末を向か
える。

このように『世間猿』は三分の二以上の話が「怪異談」によって「氣質の急変」と「不可解な結末」
を説明していると言える。これが作品全体を占める割合から推測すると、この「怪異談」による
執筆方法は意図的であったと言える。其積の氣質物から見られるように、理づめの話の進展や
説明が行われるのではなく、『世間猿』では不可解な場面が「怪異談」により説明され、これによ
り讀者は話を解するのである。したがって、矛盾するようであるが人物の氣質は「怪異談」によ
り説明され、より「現實味」を帯びると言えよう。

一方、『世間猿』の「怪異談」による結果は多くの場合、否定的な結末をむかえる。これは「物
事がいつもうまく行くわけではない」という現實的眞理と通ずる。したがって「怪異談」の否定的
結末により『世間猿』はより現實味を増していると言えるだろう。

そして、前述した如く『世間猿』では「怪異談」により「氣質が変質」した後、多くの話は否定的
結末へと向かい「笑い」は失われる。これは「因果應報的教訓」が姿を現したというよりは、「怪異」
の力、つまり「宿命」だったと説明している。したがって、『世間猿』には「怪異談」以前に「笑い」が
あり、皮肉ではあるが「怪異談」以後に「現實味」を増して「現實告發」をしていると見取れる。

ここで、秋成の第二作『世間妾氣質』(1765年刊行)が「お春の話」を氣質物の系譜の上に置いた
時、如上の要素(妖異とまで化す女の淫なる性)において明らかに異色の話である。29)と指摘
されているのと同様、『世間猿』の「怪異談」もまた然りと言える。そして、其積から秋成へと氣
質物が受け継がれていった間、世の中は変遷し、作家という生業もまた成熟していったと考え

28) 注24)の前掲書『諸道聽耳世間猿』、143-144頁。

29) 注4)の前掲書『江嶋其積と氣質物』、『世間妾氣質』の一の二・一の三小考参照。

られる。この点は、「其磧から南嶺³⁰⁾へ笑話志向の強まることを提起した。しかし、周知の通り南嶺の作の笑いは、単なるナンセンスな笑いではない。世俗批判・モデルへの揶揄といった棘を持ち、穩便な其磧とは趣を異にする。一種屈折した文人意識と共に、秋成に近いものである。³¹⁾」と述べられている点からも窺える。そして、秋成の「一種屈折した文人意識」たるものは、『世間猿』では「怪異談」により「現實味」を加え、「現實告發」するという方法で現れたのである。

一方、『世間猿』全五卷十五章の内、數少ないが人物設定により「笑い」と「教訓」をもたらす場合も見受けられる。

又此うハさが廣くなりて、目利が違ひしとて、七郎右衛門が異名を目ちがひ先生といひはやしぬ。隱居大愚此やうすを聞およばれ、大きに腹立し、七郎右衛門を呼付、いらざる目利自慢より大分の金銀をついやすのみか、人に笑ハれて大恥の名をとりし事、もと商人の道をわすれたるよりの事なり。町人は算筆とて外の事はきつとたしなミて家業をつとめ、無用の目利きいたすべからずと、席をうつしてしかりつけ、隱居へかえられぬ。³²⁾

誰が見て居たやら、此やうす翌日より一まいに取沙汰あれば、憎いかたりめと、近在の荒者どもいひ合わせてあばれこみ、壇も注連(しめ)も鳥箒も引むして捨、宮内主従を棒づくめて追立ければ、所の居住もならぬしだら。³³⁾

このように『世間猿』には確かに氣質物としての「笑い」と「教訓」があり、したがって内容の上でも先行する氣質物を一部踏襲していると言えるだろう。

四. おわりに

前の二、三章で確認したように『世間猿』には人間の力の及ばない「宿命」、「怪異談」とも呼ぶべきものへの感心が多々見受けられる。そして、この「宿命」「怪異談」の要素は先行氣質物からはほとんど見受けられなかった点である³⁴⁾。この『世間猿』の「宿命」や「怪異談」の要素は全体

30) 多田南嶺。江戸中期の國學者、浮世草子作者。

31) 注4)の前掲書『江嶋其磧と氣質物』264頁。

32) 注24)の前掲書『諸道聽耳世間猿』、一卷三回、58-59頁。

33) 上同書『諸道聽耳世間猿』、五卷二回、164頁。

34) 其磧の氣質物『世間子息氣質』、『世間娘氣質』のうち「怪異談」の要素を有するものは一つしかない。『世間子息氣質』卷一第一に出てくる「十一、二歳なる小ざかしき小坊主、大きな鼻毛ぬきをもって跡より來る」と描寫される人物である。彼は子のない木賊(とくさ)賣りの夫婦に子供はないほうが良いと言いついて風のように居なくなる。これ以外に人物の唐突な態度の一轉や神出鬼没は見られない。

のうち三分の二以上の内容に含まれ、これは本作品の特徴とも言える。

また、以上の「怪異談」の要素が含まれる話全十二話のうち二話を除く十話の結末が否定的である。このように『世間猿』の全話の中、三分の二の話の結末が否定的であるという点もまた、其磧の氣質物とは大きく區別されると言えよう³⁵⁾。

無論、前で確認したように、『世間猿』の一部には其磧の氣質物の主題である「笑い」と「教訓」もあった。したがって本作品が氣質物を全く意識しなかったとは言い切れない。この点、後續する浮世草子『世間妾氣質』の作品題からも確認できる。しかし、其磧の氣質物には見られなかった生業などの「宿命」、「怪異談」の要素が全作品のうち三分の二以上から見受けられたもの事実である。そして、「宿命」や「怪異談」の働きにより「氣質」は変質し、その宿命も予想できなくなった。これはまさに人間の眞の姿であり、人間社會に實在するジレンマと言えよう。

『世間猿』は一七六六年刊であり、秋成三十三才の時の作品である。本作品の執筆前に秋成は野良者的生活を繰り返したが、大阪の俳壇でその奔放な作風が認められ、いよいよ小説としては第一作の『世間猿』に至ったのである。第一作ではあるものの、三十三才の作品であることからして、本作品が習作のような軽いものであったとは言難い。

一方、秋成は『世間猿』の中で先行氣質物のように「笑い」の裏の「教訓」ではなく、「笑い」が去ったあとの「現實」を通して「現實告發」を行う。この「現實」は決して氣質に左右されることはない。言い換えると、人間の個々が有する本來の氣質により、人生は左右されないのである。むしろ、人間の力を越えた「宿命」「怪異」により、左右されるのが人生であるという眞理を本作品は突きつける。この人生の眞理こそが『世間猿』の中で描きたかった「主題」である事は当時の秋成の決して若くない年齢と兼ね合わせ考えると無理ない推論と思える。このように『世間猿』は既存の氣質物の形式と内容の條件も備えるものの、さらに「現實味」という要素をも兼ね備えた作品である。そして、「現實味」は皮肉にも現實とはほど遠いはずの「怪異談」により成立した。

秋成が『世間猿』を刊行した時は、其磧が氣質物を刊行してからすでに四十年以上経っていた。この時期、其磧の氣質物による流行は既に過ぎ去り、いよいよ本居宣長を中心とする國學が隆盛し、都賀庭鐘の『英草子³⁶⁾』が刊行された時期に入る。このような変革の中にあつて、小説の世界に既存の氣質物の踏襲を期待する方が不自然であるかも知れない。そして、時代はすでに「氣質」の對照と誇張ではない他のところに關心を注ぐ。つまり其磧の氣質物のように「何が特殊か」にではなく、「何が現實なのか」に關心が注がれるのである。この「現實味」に着眼したのが『世間猿』であり、秋成はこの「現實味」を「宿命」や「怪異談」という方法で提示したと言えよう。

35) 其磧の場合、『世間子息氣質』十五話のうち否定的内容の結末は二の一、三の一、三の三、四の二、四の三の五話、『世間娘氣質』十七話のうち否定的結末は四の二、四の三、五の二の三話だけであった。したがって『世間猿』は比較的多くの話が否定的結末を迎えると言えよう。

36) 1749年刊行。5巻冊。讀本の祖と言われ主として中國の白話小説を翻案した。

『世間猿』はこのように既存の氣質物にない「宿命」と「怪異談」の要素を加え、話に「現實味」を得て進展させるという新しさを見せ付けた。ここに「笑い」と「教訓」、さらに「現實味」を備えた新しい「氣質物」が誕生するのである。これは氣質物に新しい風を吹き込み、氣質物の執筆方法として「宿命」や「怪異談」という新しいものを付け加えたことと評価できよう。そして、秋成の氣質物が以降『世間妾氣質』一作のみに止まり、「宿命」と「怪異談」による「現實味」の要素をより強調する「讀本」へと傾倒していったことと兼ね合わせて見ると、秋成の氣質物は「笑い」や「教訓」を越え、説明しきれない「現實」により力を注いで行ったと言えるだろう。したがって、江戸小説史上の視点から鑑みると、『世間猿』は既存の氣質物に「宿命」と「怪異談」の要素を一つ足すことにより、話に「現實味」を増し、如何に「現實告發」するかへの關心を広げていった途上の作品と言える。そして、この「現實告發」を越えて、説明不可能な「現實」を理解し切るため、人間の時空を越えた「幻想」や「異界」でもって『雨月物語』へと発展したのであろう。以上から、氣質物は秋成を経て、その「笑い」と「教訓」はそれぞれ焦点を絞るようになり、それぞれ「戯作」と「讀本」へと発展していったと考えられる。

【参考文献】

- ・『日本古典文學大辭典』(岩波書店、1986)
- ・『時代別日本文学史辭典近世編』(東京堂、1997)
- ・現代教養文庫『世間息子氣質』(社會思想社、1990) 290-292頁
- ・井上敏幸『『諸道聽耳世間狙』冒頭話のモデル』『上田秋成全集(月報)』(中央公論社、1991. 8)
- ・神樂岡幼子『『諸道聽耳世間狙』の挿繪』『國文學(關西大學)』(關西大學國文學會、1993. 12)
- ・高永欄『혼초 니주후코(本朝二十不孝)와 『세켄 무스코 가타기(世間息子氣質)』의 비교 고찰』(韓國日本學會、2005. 8)
_____『『세켄 무스메 가타기(世間娘氣質)』의 성립 과정- 모티브에 대한 고찰을 통하여-』『日本學報』第66集(韓國日本學會、2006. 2)
- ・佐伯孝弘『江嶋其磧と氣質物(近世文學研究叢書17)』(若草書房、2004) 282-286頁
- ・堤邦彦『諸道聽耳世間猿の構造—世間と伝承』『國語と國文學』(東京大學國語國文學會、1980. 3)
- ・長島弘明『秋成研究』(東京大學出版會、2000. 9) 146頁
- ・向高亞由美『『諸道聽耳世間狙』に見られる秋成の中國古典の引用態度』『京都教育大學國文學會誌』(京都教育大學國文學會、1997. 12)
- ・森田喜郎『『諸道聽耳世間猿』における仏教批判について』『文學研究』(日本文學研究會、1973. 7)
- ・森山重雄『上田秋成初期浮世草子評釋』(國書刊行會、1997)

要 旨

本論は上田秋成の初の小説『諸道聽耳世間猿』の主題を突き止めることを目的とする。『諸道聽耳世間猿』は氣質物を有していない点を除いては、形式上氣質物とジャンル分けすることに問題はなく、これは江嶋其磧の氣質物の形式と見比べたことにより確認できる。また、その内容の一部は先行氣質物のように「笑い」や「教訓」も見受けられる。

しかし、『諸道聽耳世間猿』の場合、当時としては「宿命」とも言える生業を重視せず、もしくは受け入れられず、個人の氣質に執心したばかりに零落する人間像が多々見受けられる。無論、同様の人間像は江嶋其磧の氣質物にも描かれるが、それらの人間はあらかじめ「宿命」を拒んだのではなく、結果的に「宿命」に背を向けたものになった。これに比して『諸道聽耳世間猿』の人間像は「宿命」との葛藤を孕んでいるものである。

また、『諸道聽耳世間猿』での氣質の急変や氣質とは関係なく向かえられる結末は、江嶋其磧の氣質物のように理づめに説明されるのではなく、「怪異談」により説明される。このように、人間の力の及びかねる「怪異談」の要素は、先行氣質物にはなかった『諸道聽耳世間猿』固有の斬新さであると言える。そして、一見矛盾するようであるが、氣質の急変や氣質とは関係なく向かえられる結末は「怪異談」により「現實味」を帯びようになる。

以上のように「宿命」や「怪異談」の要素こそが『諸道聽耳世間猿』により「現實味」を帯びさせるものであり、これは「現實告發」の意義を持つ。つまり、『諸道聽耳世間猿』の主題は「現實告發」である。秋成の後續する『世間妾氣質』や『雨月物語』とも重ねて考えてみると、このような「現實」を「宿命」や「怪異談」と兼ね合わせて見つめる視線、所謂「現實告發」は『諸道聽耳世間猿』の時期より秋成の持つ文學觀であったかも知れない。この意味で『諸道聽耳世間猿』は氣質と「宿命」、「怪異談」の要素を織り込み「現實告發」した作品と言えよう。

キーワード：上田秋成、『諸道聽耳世間猿』、氣質物、宿命、怪異談、現實味、現實告發

투 고 : 2006. 2. 28
1차 심사 : 2006. 3. 11
2차 심사 : 2006. 4. 1